

# 夏

放課後、幼馴染のハルに呼び出された。

家が近所で、とくに約束してなくとも一緒に登下校する仲。

今日だってわざわざ連絡なくとも一緒に帰るつもりだったんだけど。

指定された空き教室には、西日に照らされたハルがいた。

遠くから聞こえる運動部の声と吹奏楽部の練習の音。

いつもは無邪気なハルが、静かに校庭を眺めている。

…待って。これって今から告られる感じ!?

ずっと片想いだと思ってたけど、ハルも俺(私)の事が好きだった?

期待と緊張を悟られないように、平静を装ってハルに声をかけた。

少し間をおいて差し出された手紙。

そしてハルからの告白。

ヤバい、ヤバい、ヤバい!

どうしよう、めっちゃ嬉しい!

緩みそうになる頬を引き締め「俺(私)もずっと好きだった」って伝えようとした瞬間、笑い出すハル。

最悪。

ドッキリ?罰ゲーム?

全然、笑えないんだけど。

ショックとイライラで言葉が出てこない。

ハルの顔を見たくないで視線を落とすと、差し出された手紙が目に入った。

そんな物まで用意してバカにしたかったわけ?

文句の言葉を探している間に、先にハルが口を開いた。

差し出された手紙は、アキからのラブレターらしい。

まじか。

アキの気持ちには応えられないけど、好意は素直に嬉しい。

ハルのイタズラがなければ、もう少し喜べただろうなとか、アキに何て言えば傷つけてないかなとか考えると、ハルが勝手に話し出す。

ただでさえ凹んでるのに、ハルからアキの推薦なんて聞きたくない。

アキがいい子(いい奴)だってことは、俺(私)もよく知ってる。

普段は大人しいけど、困ってる人がいれば迷いなく手を差し出す行動力がある。  
この前も、駅前で日本語が通じない観光客に四苦八苦しながら道案内してるとこ見たし。  
意外と行動力があるんだよな。

俺(私)は日和って、いまだに告白できてないのに。

自分の不甲斐なさに何も返事ができない。  
そんな俺(私)に対して、ハルはいつも通りの憎まれ口。  
気まずくてハルの話にとりあえず相槌を打つ。

あれ?  
ちゃんと聞いてなかったけど、今何て言った?  
うわ、まじか。  
ハルに先越された。  
今度は冗談じゃないよな?

一瞬の疑心暗鬼。  
だけど、赤く染まった耳と不安が混じる瞳で確信した。  
だったら答えは決まってる。

「俺(私)も、ずっとハルのことが好きだった。  
こんな俺(私)で良ければ、よろしくお願いします。」